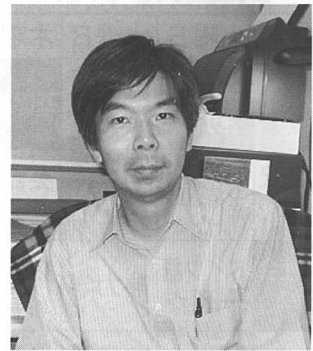




インタビュー



酒井邦嘉先生

87年東大理学部物理学科を卒業し、92年に博士課程終了。東大医学部第一生理助手、マサチューセッツ工科大学訪問研究員を経て、現在東京大学助教授。

好奇心の追求

——講義を行ううえで、どのようなことに気を付けていらっやいますか。

知的好奇心に訴えるということでしょうね。誰が聞いても面白いな、と思うこと。これに関しては文系も理系もないでしょう。そういう新鮮な驚きをもってもらおう。一緒に、ああ不思議だな、と思ってもらおう。学生は先生なら何でも知っていると、思ってもいいけれど、脳の現象はまだ誰にもわからないことの方が多くいますよ。

——今の学生についてどのような印象をお持ちですか。

一般的にこうだというのは難しいと思いますが、学ぶことに、だんだんお手軽になっていくということに危機感があります。学問というのはどこかで汗をかき必要があるんです。ですから、そこでできるだけ汗をか

かないようにしようという価値観は危ないと思う。今はインターネットが大きく文化を変えたから、考える前に探してしまおう。それが大きく精神を変えつつあるとしたら大変です。

——ああ、思い当たります。無駄だと思つてやめてしまふ：そう、無駄だからやめようというのではなく、無駄だと思える部分が科学にとってはすごく重要なんだよ。

——それでは、どのように学生に学び感じ取ってほしいとお考えですか？

積極的に様々なものに触れて、そのなかで自分の好奇心に合うものを何か見つけてくれれば、教師も学生もお互いやっていて良かったと思えるんじゃないかな。例えば語学をとつても、その言語を使いこなすためなら駒場の授業だけでは足りない。しかし、こういうものがあるんだということに触れることは非常に重要だと思う。自分の文化的な背景を広げることができるとはすばらしいことだと思います。

——ところで先生はどのような研究をなさっているのですか。

僕の今の研究のテーマというのは、言語はどのように脳から生まれるかということです。ただ、多くの脳科学者と異なった立場を取っているのは、言語を通して人間の特殊性を知りたいという姿勢です。言語というのに対しては、動物も使っているコミュニケーションという位

置づけが圧倒的に根強い。その中で、人間の言葉はどこが違うのかということがわかれば、人間の性質がわかってくると思うのです。

才能を見つける

——先生は進路を決めるときに、何を重視するべきだとお考えですか。

ひとつはやっぱり自分で決めるということじゃないかな。もちろん進振りなど外的な要素もあるんだけど、しっかりとアンテナを張って、それにキャッチされたもので自分ならこれを見ていくんだというものを見つけて。つまるところ自分は何をしたいかという問題になつてくると思う。僕はもともと物理をやりたいかったが三学期に生物学にのめりこんで、物理学科に行つて生物をやるという変わった選択肢を取つたわけ。そういうことも自分で講義をとつていく中で決まってきたと思う。

——先生ならこの駒場の環境をどのように活かしますか。

選択肢が広いから学問のさまざまな状況がわかると思う。そのときにこの分野は将来性がありそうだな、とかいうところを自分で決めるときは参考にして。最先端の話をつみ砕いてしてくれたら、実際に現場でやっている研究者の生の言葉や色々なエピソードが聞けるわけだ。それは講義の内容以上に重要だと思う。

——講義内容だけでなく、人間性に触れることが重要ということなんです。

——では、新入生にメッセージをお願いします。

基本は、何事も熱意を持つてやることだと思います。多少時間がかかっても面白そうだからのめり込むとか、そういうことがあつてもいい。自分がアンテナを向けたほうに熱意を傾ける。それができる好奇心が研究者にとっての資質だと思います。自分の才能を自分で見つけることができれば一番いいし、駒場というのはその大きなチャンスだと思います。

取材後記

酒井先生は大学在学中からすでに将来研究者の道に進むことを決めていらつたそうです。自分にとって興味深い学問分野を探すと先生のお手本だと感じました。この姿勢は研究者を目指す学生のみならず、多くの学生の指針となるものだと思います。